

アルフレッド大王のオロシウスの古期英語訳 におけるGotlandについて

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007361>

アルフレッド大王のオロシウスの 古期英語訳における **Gotland** について

法政大学キャリアデザイン学部教授 岩谷 道夫

1.

9世紀後半、デーン人の侵入に対し、ウェスト・サクソンの地でアングロ・サクソン王国の孤壘を守り、878年のウェドモアの条約で、デーン人の侵入をひとまず終焉させたウェセックス王国のアルフレッド大王は、イングランドの統一の後、様々な文化的事業に着手した。その一つが、ラテン語で著わされた作品の古期英語への翻訳である。具体的には、ベエダ、オロシウス、ポエティウス、グレゴリウスI世のそれぞれのラテン語の著作を、アルフレッド大王自らも参画して、翻訳した。アルフレッド大王のその翻訳の企図は、イングランドにおける文化の荒廃についての痛切な認識がもとになっていた。主にデーン人の侵入に起因して、ノーサンブリアのベエダに代表されていたイングランド文化の成果は、ほとんど灰燼に帰していた。アルフレッド大王は、ベエダの時代のノーサンブリア文化を、再びイングランドに復活させるために、ラテン語の作家の著作を古期英語に翻訳しようと考えたのである。もっともベエダを含め、ノーサンブリアでなされた著作は、すべてラテン語によるものであった。そのラテン語の著作をイングランド人の言語である英語に翻訳することを通して、その文化の復興を目指そうとしたアルフレッド大王の施策は、イングランドにおいては極めて斬新なものであり、ノーサンブリアの文化を越える意義を持っていた。その一世紀ほど前にフランク王国国王シャルルマーニュが、ノーサンブリアのアルクイン、フルダのアインハルト、等を集め、フランク王国でカロリング・ルネサンスを开花させていたが、その事がアルフレッド大王の念

38 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

頭にあったものと思われる。シャルルマーニュは、各民族固有の言語の重要性についての正しい認識を持ち、ギリシア・ローマの古典語ではなく、フランク王国の固有の言語の涵養に努めていたからである。

ところで、アルフレッド大王の翻訳事業のうち、オロシウスの翻訳には、その冒頭に、5世紀のオロシウスの原典には見出されない記述が付記されている。それは、9世紀におけるイングランド人の世界地理に関する知識を示すもので、またアルフレッド大王の独自の記述であることから、重要な記述であった。興味深いのは、その記述に続いて、Ohthere オーホトヘレと Wulfstan ウルフスタンという二人の人物による、スカンジナビアおよび北ドイツとその東方の航海譚が加えられている点である。そしてそこには、Gotland ゴットランドという記述が、オーホトヘレに二箇所、ウルフスタンに一箇所、全部で三箇所見出される。今日 Gotland ゴットランドとは、スカンジナビア半島東方のバルト海の島で、その島はその名前の通り、かつて Goths ゴートの居住していた拠点地域の一つであった。しかしながら、アルフレッド大王の記述の三箇所の Gotland は、そのすべてがゴートの居住地域の Gotland という意味で用いられているわけではない。その中に、ジュートの地である Jutland ユトランドという意味で用いられている箇所もあるからである。それでは、Gotland は、なぜ二通りの意味で用いられているのであろうか。言葉を換えれば、アルフレッドは、どのような意図でユトランドを表わす場合にもゴットランドと記述したのであろうか。本稿では、その問題を考えたいと思う。それは、その問題を通して、アルフレッド時代のイングランド人が、ジュートとゴートをどのように捉えていたかが、多少なりとも明らかになるとと思われるからである。

2.

アルフレッド大王のオロシウスの古期英語訳の中で、Gotland が現われるのは、1. 86、1. 94、1. 105の三箇所である⁽¹⁾。最初の二箇所は、オーホトヘレの航海の中で、そしてもう一つはウルフスタンの航海の中で言及されている。オーホトヘレもウルフスタンも、アルフレッド大王に、自らの冒険的な航海譚を披露していて、その中に Gotland という名称が言及されているのである。

その二人の航海について、吟味してみたい。

その前に、オロシウスについて少し触れることにする⁽²⁾。西暦4世紀後半、西ローマ帝国の属州ヒスパニアで生まれたオロシウスは、イベリア半島から地中海を渡り、師と仰ぐ聖アウグスティヌスに会うために、聖アウグスティヌスが司教をしていたアフリカのヒッポ（Hippo Regius）に行く。オロシウスの求めるキリスト教における魂の在処という問いについて、聖アウグスティヌスは、イエルサレムにいた聖ヒエロニムスに手紙を書き、オロシウスに対する教えを依頼する。聖ヒエロニムスは、当時イスラエルで、ヘブライ語とギリシア語の聖書の原典を、ラテン語に翻訳していた。いわゆるウルガタ訳聖書である。聖アウグスティヌスと聖ヒエロニムスの双方の深い信望を得て、オロシウスは、聖アウグスティヌスと同じ目的のもとに、歴史書の執筆にとりかかる。当時西ローマ帝国は、ゲルマン人諸部族の侵入もあって、崩壊の危機に瀕していると感じられていた。そしてそのような危機的な状況を生じさせたのは、ローマ人が、旧来のローマの神々を捨てて、キリスト教を信仰するようになったためであるという風説が広まっていた。聖アウグスティヌスは、その風説に対し反駁するために『神の国』を著わしたのである。例えばゲルマン人の西ゴート王国の人々は、カトリックを信仰していたわけではないが、既にウルフィラのゴート語訳聖書を通して、アリウス派のキリスト教徒になっており、国王アラリックのもとで首都ローマに侵攻した時も、決して暴虐行為を行わなかった。つまり、キリスト教を信仰していたゲルマン人諸部族は、決してローマ帝国を崩壊させようとしたわけではなかったのである。したがって、ローマ帝国の崩壊への予兆はキリスト教によるものではなかった。そのような状況のもとでオロシウスは、聖アウグスティヌスに請われて、聖アウグスティヌスと同じ意図で歴史書を著わし、その題名を『異教徒を駁する歴史』としたのである⁽³⁾。そのオロシウスの歴史書は、西洋中世の規範的歴史書となった。8世紀のベーダの『英国民教会史』もそれに依拠し、またアルフレッド大王も、そのオロシウスの歴史書の重要性を深く認識していたので、それを古期英語に翻訳したいと望んだのであった。それでは、アルフレッド大王のOE訳におけるオーホトヘレとウルフスタンの航海譚に戻ることにしたい。

まず、最初の語り手であるオーホトヘレは、二回航海している。オーホトヘ

40 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

レは、自身の話の中でも触れているように、今日のノルウェーの出身である。最初の航海では、故郷のスカンジナヴィア半島北西部の港町 Halgoland⁽⁴⁾から半島西岸に沿って北に向かい、半島北端まで到達する。そしてさらに東に進み、半島の付け根の白海に至る。その航海の中では、Gotland は現われない。オーホトヘレは、二回目の旅行では南に向かう。故郷の Halgoland から半島沿いに南に航海し、やがて半島南端に至る。そして半島の対岸に Gotland が、そしてその次に Sillende が現われる。Sillende とは今日のデンマークのシェラン島である。その場合、半島の対岸に Sillende の前に現われる Gotland とは、どこであろうか。スカンジナヴィア半島南端を西から東に航海している時に、対岸に最初 Gotland が現われ、そしてその後で Sillende が現われるのである。今日の Gotland であれば、Sillende からさらに奥に進んだ時に、バルト海の中ほどに初めて現われるものと考えられる。従って、オーホトヘレの言及している Gotland は、今日の Gotland ではないと考えざるを得ない。スカンジナヴィア半島南端からシェラン島に進む間に、対岸として現われるのは、Gotland ではなく Jutland、すなわちユトランド半島である。それゆえオーホトヘレの Gotland は、今日の Gotland ではなく、ユトランド半島と考えられる。それがオーホトヘレの最初の Gotland についての言及箇所である。オーホトヘレは、そのように記した後、二回目の航海について、あらためて振り返っている。オーホトヘレは、故郷の町の近くの港から旅立って5日かけて Hæðum という港に着いたと語り、そこがアングル、サクソン等の居住地域の間にあると述べ、そこが現在はデネ（デンマーク）に属しているとしている⁽⁵⁾。さらにオーホトヘレは、その航海の時に、左手にデンマークがあり、右手が海で、Hæðum に着く2日前に、右に Gotland、Sillende、そして他の多くの島々を見たと言っている。その Gotland が、オーホトヘレの二箇所目の Gotland の記述である。さらにオーホトヘレは、Gotland、Sillende、そしてその他の島々が、アングルがブリテン島に渡る前の居住地であったとしている⁽⁶⁾。そうであれば、その二箇所目の Gotland が、現在の Gotland でなく、ユトランド半島であることは自明であろう。

二人目の語り手であるウルフスタンの航海は、オーホトヘレの航海の終着地点の、Hæðum から出発する。そして、バルト海の南の沿岸に沿って東に進

み、左手にボルンホルム島を目にする。ボルンホルム島は今日デンマーク領であるが、ウルフスタンによれば、当時は王を戴いている独立王国であった⁽⁷⁾。さらにウルフスタンは、その先に進み、左手に Gotland を見る。ウルフスタンは Gotland をスウェーデンに属していると述べている。その Gotland が、アルフレッドのオロシウスの OE 訳に付記された記述の中の、3 箇所目の言及部分である。その Gotland は、前述のオーホトヘレの二つの Gotland とは異なり、明らかに今日のバルト海の島の Gotland と考えられる。その後ウルフスタンは、Vistula 川 (Weichsel 川) の近くで上陸し、バルト海の南岸の都市 Truso に着く。そこから東は広大な Estland エストランド (今日のエストニアを含む地域) になっていて、ウルフスタンは、エストランドの人々の生活習慣について詳しく述べている。そのウルフスタンのエストランドの話が一区切りついたところで、ウルフスタンの話が終了し、オーホトヘレとウルフスタンの二人の話が、ひとまず終えられるのであるが、不思議なことに、その二人の話が完結したという説明はなされないまま、オロシウスの原文のギリシアについての解説の翻訳に戻るのである。もっとも、二人の航海の話は、もともとオロシウスの原文で、アジア、ヨーロッパ、アフリカの三つの分類がなされ、アジア、ヨーロッパ、アフリカについてのおおよその輪郭が述べられた後、アジア (主にインドとメソポタミア)、アフリカ (主にエジプト)、そしてヨーロッパについての具体的な解説の中の挿話として付記されていたものであった。ヨーロッパの境界について触れられた部分の中に Germania についての記述箇所があって、その Germania の東の境界がエストランドであると述べられた後、オーホトヘレとウルフスタンの二人の航海の話になるのである。そうであれば、話がいったんとぎれた感があるとしても、その前後のエストランドの記述からすれば、一貫しているとは言えるかもしれない。

3.

それでは、オーホトヘレとウルフスタンの航海について、本稿との関連する個所である Gotland は、これまでどのように捉えられていたであろうか。諸研究者の見解に触れながら考えることにしたい。

20世紀初頭にゲルマン人諸部族の故地、とりわけ、イングランド人を構成す

42 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

ることになったゲルマン人諸部族について、極めて深い議論を展開し、後のその領域の先駆的業績を著わしたチャドウィックは、アルフレッド大王のオロシウスのOE訳の中のオーホトヘレの記述について、重要な指摘をしている。チャドウィックは、ユトランド半島におけるアングルとジュートの故地について述べ、ネンニウス、ベーダ、エゼルウェアルド（エゼルウェルド）、ウィリアム・オヴ・マームズベリーに言及した後、アルフレッドのオロシウスのOE訳に触れている⁽⁸⁾。チャドウィックは、アングルについてのベーダの記述の正しさを確定的なものにし、さらにそれに詳しい記述を加えたものが、アルフレッドのOE訳であり、またそれに付加されたオーホトヘレの航海譚であるとする。

チャドウィックは、オーホトヘレの航海譚の中の、最初のGotlandの表記に言及し、それがJutland以外の何物でもあり得ないとしている⁽⁸⁾。チャドウィックが強調しているのは、オーホトヘレの南への航海であり、とりわけ、その中の、「アングルは、イングランドに渡る前は、GotlandとSillendeおよびその他の島々に居住していた」という点を重要視している。そこに、アングルの故地について、ベーダの記述を補完する最も重要な点が見出され则认为しているからである⁽¹⁰⁾。しかしながら、チャドウィックは、なぜオーホトヘレが、今日のJutlandをGotlandとしているかについては、言及していない。

チャドウィックと同時代のショアーには、オーホトヘレとウルフスタンについて、いくつか言及が見出される。ショアーにおいて強調されているのは、もともとジュートが、ゴートと同じ部族であったという点である。ショアーは、ベーダでジュートとして記されている部族が、ジュートの移住した地域とされるケントの入植者の実態から、実はゴートとフリーズアンであったとする⁽¹¹⁾。ショアーのそのような見解の一つの論拠となっているのは、アルフレッド大王の伝記を著わしたAsserアッサーの記述である。それには、アルフレッド大王の母方の祖父が、ゴートもしくはホワイト島のジュートの出身であると述べられているからである⁽¹²⁾。アッサーは、アルフレッドの宮廷における最も優れた知識人の一人で、アッサー自身はウェールズ人であった。アルフレッドは、かつてシャルマーニュがカロリング・ルネサンスで行ったように、自身の宮廷を、民族、国家の枠を超えて優れた人物を呼び寄せた。ウェールズのアッ

サー、大陸のサクソンからはジョン、旧マーシア王国からプレグムンド、ウェルフェルス、等である⁽¹³⁾。とりわけアルフレッドの信望が厚く、アルフレッドの自伝の執筆を委ねられたアッサーが、当時のイングランドにおいて最高度の知識人であったことは想像に難くない。しかしながらアッサーの記述自体も、当時の認識の限界を示していると考えられる。ショアーは、アッサーがジュートとゴートと同義の名称であるとしていることから、それをもとに、ジュートとゴートを同一部族であるとしているのであるが、それは、必ずしもジュートとゴートが同一部族である論拠にはならない。しかしながら、そこに、アッサーの時代における、ジュートをゴートと考える考え方の定着を見出すことはできる。後で少し触れるが、アルフレッドは、ポエティウスの『哲学の慰め』の古期英語訳も行った。ポエティウスは、当初東ゴート王国のテオドリック大王の最大のブレンであった。それ故アルフレッド大王は、ゴートについての知識がないはずはなく、またそれはアッサーにおいても同様だったであろう。ただ、アルフレッドもアッサーも、ジュートについての知識に関しては、必ずしも正確であったとは言えないのである。ベータで、ワイト島の居住者として言及されたジュートは、アッサーでは、そのジュートがゴートと同義と変化している。それはむしろジュートについての正確な認識が失われていることの現われであると言えよう。ベータの時代からアルフレッド大王の時代までのイングランドにおけるジュートについての認識の変化は、既に触れたことがあるので、詳しく立ち入らないが⁽¹⁴⁾、アッサーの記述が、ジュートがゴートであるという事実の論拠にはならないということを再確認しておきたい。しかしながら、そのアッサーの記述が、当時ジュートがゴートとして認識されていたということの、極めて重要な典拠であることは、確かである。

ショアー自身の記述に戻れば、ショアーは、オーホトヘレにもウルフスタンにも言及しているが、ショアーが言及している Gotland は、ウルフスタンの Gotland のみである⁽¹⁵⁾。ウルフスタンの Gotland は、前述のように今日の Gotland であるが、ショアーはジュートがゴートであると考えているので、オーホトヘレの Gotland に言及していなくとも、オーホトヘレの Gotland が Jutland と同義であったと考えていることは明らかである。

ホジキンは、アルフレッド大王のオロシウスの OE 訳について触れ、まずア

44 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

ルフレッドの、ゲルマーニアの領域についての認識の誤りについて言及している⁽¹⁶⁾。アルフレッドは、オロシウスによっては十分詳細には述べられていなかったゲルマーニアを、より詳しく正確に記述したいと望んだのであったが、ゲルマーニアの領域について、実際よりはるかに広い地域としていた。それについて、ホジキンは、当時の知識の限界からすれば仕方のないことであり、むしろアルフレッドは、正確な経度や緯度に依拠することの出来ない困難さを、彼に与えられた当時の知識を適切に使用して記述し、それ以前の誰の記述と比しても、北ヨーロッパに関するより多くの知識を与えてくれたと述べている。そしてその次にホジキンは、オーホトヘレとウルフスタンの旅について触れている。もっともホジキンは、オーホトヘレの旅の方に重点を置き、ウルフスタンの旅については、あまり言及していないが、ホジキンは、オーホトヘレの南への旅について、オーホトヘレの故郷の *Halgoland* から、同じノルウェーの *Schringeshel* という港町までの航海が、一ヵ月以上かかっていることから、その航海を一つの独立した旅と考え、それ以後の航海と区別する。つまり、それ以後の、*Gotland* と *Sillende* を目にする旅を、三回目の航海（南方への旅としては二回目）と考えるのである。そして、ホジキンは、その、*Schringeshel* から *Hæðum* までの三回目の航海で、*Jutland* とオーホトヘレがその側を通り過ぎたいくつかの島々が、アングルがブリテン島に来るまで居住していた場所であったという事が、アルフレッドに最も強い関心を抱かせたと述べている⁽¹⁷⁾。それがアルフレッドにとって、ホジキンの言うほど強い関心事であったかどうかはわからないが、その事を重要な知識としてアルフレッドが記述していることは確かである。事実その箇所は、既にチャドウィックも強調したように、後のアングルの故地の研究において、最も重要な典拠の一つになっている。

ホジキンは、二人の旅の記述を通して、アルフレッド大王の考え方に特徴的であることとして、激しく戦ったデーン人に対する厳しい視点が、全く見出されないことであると述べている。つまりそこに見出されるのは、かつて同じゲルマン人であった祖先についての、同族意識の吐露以外の何物でもないとするのである⁽¹⁸⁾。ホジキンの言うオーホトヘレの三回目の旅について、ホジキンは、*Hæðum* の位置している地域を *Jutland* であるとしている。しかしホジキ

ンは、アルフレッドの表記の中で、なぜそれが Gotland という表記になっているかについては、触れていない。また、ホジキンは、ウルフスタンの旅に言及している箇所においても、その中の Gotland には触れていない。

チェーンバーズは、古期英語で書かれた最古の叙事詩『ベオウルフ』に関する大著の中で、ベオウルフの故国である Geatas が、ジュートであるか否かという当時の論争に解答を与えるべく、網羅的に議論を展開しているが、その過程で、アルフレッド大王のオロシウスの古期英語訳、そしてオーホトヘレの Gotland に触れている⁽¹⁹⁾。チェーンバーズは、オーホトヘレの旅行譚の中の Gotland は、まぎれもなく Jutland であるとする。そして Jutland が、なぜ Gotland と記述されたかについて、次のように述べている。即ち、古期英語においては、半母音の [j] を表わす文字がなかった；従って Jotland を表わすために、アルフレッドは、Geotland という表記を用いた。その Geotland が、便宜上 Gotland となったのである、と⁽²⁰⁾。チェーンバーズは、その説明を、『ベオウルフ』の故国 Geatas について、Geatas がユトランドであったとする説に反駁するために述べている。つまり、当時の一方の有力な説であった、Geatas がジュートの国であるとする説に対して、オーホトヘレの Gotland はジュートの地であり、それは Geotland の別の表現であって Geatas ではない、もしそれが Geatas の地であるとすれば、そこは Geataland になったはずであるからであると述べている。チェーンバーズは、したがって、Gotland を、ヨートランドと読み、ゴートとは無関係であるとするのである。しかしチェーンバーズは、オーホトヘレの Gotland には触れていても、ウルフスタンの Gotland には触れていない。チェーンバーズは、ウルフスタンの Gotland もジュートと考えていたとは思われないが、そのウルフスタンの Gotland についての記述が見出されないのは残念である。

チェーンバーズと同じく『ベオウルフ』の研究家であったマローンは、アルフレッドのオーホトヘレの航海譚の中で、Jutland が Gotland となっている点について、本来それは Gautland となるべきであり、それが南部の英語で Gotland とされているに過ぎないと述べている⁽²¹⁾。つまりマローンは、ユトランドをゴート一派の Gaut が支配していたという考え方に基づいて述べているのであり、その Gaut が『ベオウルフ』の故国と考えているのである。

46 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

しかしながら、マローンの言う **Gautland** がユトランドを表わしているということを、文献で立証することは困難であろう。

また、アッサーのアルフレッド大王のラテン語による伝記の編纂者であったスチーブソンは、アルフレッドのオーホトヘレの航海の中で、**Jutland** が **Gotland** と呼ばれているのは、**Iuti** と **Goths** の混同の現われであり、アルフレッドによるその混同の正当化であるように見えるが、当時 **Jutland** は、北方の人々に **Gotland**、というよりはむしろ **Hreiðu-Gota-land** として知られていた可能性があり、必ずしも混同とは言えないと述べている⁽²²⁾。スチーブソンは、明言は避けているが、**Jutland** が、北欧のゲルマン人の人々にとって、**Gotland** と関連を持った地域であることは確かであろう。ちなみにスチーブソンと前述のマローンは、次項で触れるリークの見解に、様々な影響を与えている。あらためてそこで検討することにした。

英国史の碩学ステントンは、中世英国史の著作の中で、オーホトヘレとウルフスタンについて簡単に触れている。ステントンは、オーホトヘレの南への旅行について、オーホトヘレの名前に言及してはいないが、その旅行で現われる **Gotland** について **Jutland** であると明言している⁽²³⁾。ステントンは、また、チャドウィックのように、アングルがブリテン島に渡る前に、**Jutland**、そしてその周囲の島々に居住していたという記述の重要性を強調している。

考古学者のダケットは、オーホトヘレの **Gotland** にも、ウルフスタンの **Gotland** にも触れていない。しかしながらダケットは、オーホトヘレとウルフスタンの旅行譚について、本稿のテーマとは直接関連はないが、興味深い言及を行っている。それは、オーホトヘレがなぜアルフレッドの宮廷に来たかについての推測である。ダケットは、ノルウェーで 885年に **Harold Fairhair** が **Hafrisfjord** の戦いで勝利した後、その **Harold** による王位の篡奪に怒りを持つ人々が船でノルウェーを後にし、オーホトヘレもその一人であったとするのである⁽²⁴⁾。デン人へのブリテン島への侵入の時に、デンマーク人だけでなくノルウェー人も侵入していたことが明らかになっているが⁽²⁵⁾、そのノルウェー人も含むデン人を撃退したのが、アルフレッド大王であるということを知って、オーホトヘレがアルフレッドのもとに庇護を求めたと考えるのである。ダケットはオーホトヘレの話の中の、ノルウェーでの商業、貢物、等からそのよ

うに結論づけている。文献による裏付けの困難な事柄であるが、その推測には説得力があるように思われる。

やはり考古学者のロインは、オロシウスのアルフレッド訳に言及し、オーホトヘレの航海に触れている⁽²⁶⁾。ロインはまずベータのアングル、サクソン、ジュートのブリテン島への移住の記述に言及した後、アングルの故地に関して、アルフレッド大王によるオロシウスの古期英語訳について触れているのであるが、そこでロインは、オーホトヘレが、オスロフィヨルドからの旅行で今日のドイツの Schleswig に到着するまでの二日間の中に、船の右舷の船首の方に Jutland、Sillend、そして多くの島々が広がっていた、というふうに略述している⁽²⁷⁾。つまり、ロインはその言及で、オーホトヘレの Gotland が、今日の Jutland であることは自明としているのである。ただロインの関心はジュート自体にあるので、アルフレッドの Gotland という表記にはそれ以上触れず、ウルフスタンの Gotland にも触れていない⁽²⁸⁾。ロインは、アングルとジュートの故地に関するアルフレッドとベータの記述に関連して、次のように述べている⁽²⁹⁾。

Alfred himself commented that ‘on these islands dwelt the Engle before they came hither’. Bede, wise in his generation, hazards no guess as the precise location of the Jutes.

上でロインは、アルフレッドの、ブリテン島に来るまでのアングルが、Jutland の近くの多くの島々に居住していたとする記述の重要性を強調し、一方、ベータが、ブリテン島へのゲルマン人諸部族の移住に関して、ジュートの故地については、当時としては賢明にも敢えて推測はしないとしている。しかし実際にはベータは、ジュートの故地について、アングルがジュートとサクソンの間に居住していたと述べているのであり⁽³⁰⁾、ジュートの故地について確言はしていないとしても、それがアングル人の故地の北方であるということは示唆しているのであるが。ロインの主張の中心部分は、ジュートではなくフリージアンが、ブリテン島の移住に最初に関与したということであり、その観点からベータの、ジュートについての比較的曖昧な記述を、賢明なもの

48 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

としているのである。一方でロインは、上の引用文でも明らかなように、アルフレッドが、アングルの故地を、ベータの記述に見られるジュートとサクソンの間の地域だけではなく、Sillende（シェラン島）とその他の島々でもあったと述べている点を強調している。しかしその場合、Schleswig を含むユトランド半島が、アルフレッドではなぜ Gotland と表記されているのか、その点についての言及が望まれるであろう。

以上、様々な研究者の見解を検討してみると、アルフレッドの記述の中のオーホトヘレの Gotland について、それを Jutland であるとする考え方が共通していると言える。オーホトヘレの Gotland を、Jutland とする研究者のうち、その見解の根拠を特に示さない場合もあるが、根拠が示されているのは、例えば、ショアー、チェインバーズ、マローン、そしてスチーブンソンにおいてである。ショアーの場合は、もともとジュートとゴートは同義なので、Jutland が Gotland と表記されているのは、至極当然であるという考え方である。一方、チェインバーズは、Gotland は Geotland の省略形で、Geotland はヨートランドと発音されていて、当時の Jutland を表わす語であったというものである。しかしながら、その場合、バルト海の Gotland も同じスベリングになっている理由についての説明は見出されない。マローンは、Jutland は、ベーオウルフの故国 Geatas が支配していた地域となったので、その後 Gautland となり、それが南部英語の表現で Gotand になったとした。しかしながらベーオウルフの故国がユトランドであるということは、文献上明らかにされていない。スチーブンソンは、北欧のサガから、Jutland を Gotland の関連語で表現する場合を指摘し、北方の人々にとって、Iuti と Goths が同一視されていたとした。

ところで、アルフレッド大王の翻訳事業の一つに、ポエティウスの古期英語訳がある。ポエティウスは東ゴート王国の高官を務めた旧西ローマ帝国のガリアの貴族であった。東ゴート王国の名君テオドリック大王により若いころから厚遇を受け、王国のために尽力していたポエティウスは、東ゴート王国の内紛が原因でテオドリック大王の逆鱗に触れ、処刑されることになる。その時に書き残したのが、中世の西洋全域で広く読まれた、『哲学の慰め』であった。そのポエティウスのラテン語による著作を、アルフレッド大王は古期英語に翻訳

しようとしたのである。その場合、アルフレッド大王が、東ゴート王国、ゴート全般について、正しい認識を持っていたことは、想像に難くない。

それでは、アルフレッドのオロシウスの古期英語訳に見出される二つの Gotland という表記で、アルフレッドはそれをゴートに関するものと考えていたのであろうか、それともジュートに関するものと考えていたのであろうか。その問題を、古期英語詩 *Beowulf* 『ベオオウルフ』の Geatas の問題を追究した J. A. Leake を中心に考えることにする。

4.

かつて、『ベオオウルフ』における主人公ベオオウルフの故国 Geatas イェーアタスが、アングル、サクソンとともにブリテン島に渡ったジュートの国であるか、あるいはスカンジナビアの Gautar ガウタルの国であるかという長期に及ぶ論争があった。リークは、まずその論争をふりかえる⁽³¹⁾。その論争は、最終的には、チェインバーズ、クレーバーという『ベオオウルフ』の有力な研究者達の、音韻対応に基づいた、Geatas を北欧の国家ガウタルであるとする説が、大方の認めるところになり、それが定説になった。それに対して、リークは、その争われた二つの説のいずれも実体を表わしていないとし、第三の説を提示した。リークは、『ベオオウルフ』のイェーアタスについて、それが伝説上の Getae を古期英語に直したものと考えた。イェーアタスが実在の国家ではなく、虚構の国家であり、その国家が、ジュート、ゴート、デネ、等がすべてそこから生じたところの、古来ヨーロッパに伝えられてきた、伝説の Getae という国家であるとし、そのラテン語表記の Getae を、古期英語に直したものが Geatas であるとしたのである⁽³²⁾。

リークのその説は、大変重要な指摘であったが、一つの問題があった。それが『ベオオウルフ』の中の、「フィン王の挿話」に見出される Eotan エーオタンというゲルマン人をどのように捉えるかということであった。エーオタンとはジュートのことで、『ベオオウルフ』の著者は、エーオタンすなわちジュートと、イェーアタスとを、書き分けていた。前者はデネと敵対している悪の存在として、そして後者イェーアタスは、主人公ベオオウルフの故国でデネの友邦国家としてである。イェーアタスが、伝説上の Getae であるならば、それ

50 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

は、ジュート、ゴート等を含む国家であるので、エーオタンすなわちジュートと敵対することは、自家撞着となる。従って、イェーアタスは伝説上の国家ではなく、実在したスカンジナビアの国家 *Gautar* であったと考えられるのである⁽³³⁾。

筆者はこれまでリークの提示した斬新な考えを検討し、チェーンバーズの定説が正しく、リークの説が首肯し難いものであるという結論に至った。しかしながら、それは『ベーオウルフ』の故国としてのイェーアタスについてであった。一方、アルフレッド大王により諸々のラテン語の書物が古期英語に翻訳されたころの人々の、ジュートとゴートについての考え方がどのようなものであったかについてのリークの見解は、極めて穏当なものと考えられる。つまりそれは、9世紀後半のイングランドにおけるジュートについての認識が、ジュートとゴートとデネの合体されたものであったということである。アルフレッド大王の時代、ユトランド半島は、デンマークの領土になっていたが、それがジュートの故地であるという認識があったと同時に、それ以上に、それが広い意味でゴートの地でもあるという認識が強かったのである⁽³⁴⁾。

ところでリークは、アルフレッドのオーホトヘレの航海譚の *Gotland* という記述に関連して、前項で触れたマローンとスチーブンソンの見解について言及している。リークの見解は、マローンやスチーブンソンに重なる点も多く、リークがその二人の研究者に負うところも少なくないと思われるが、リークは、それぞれの見解について批判を試みている。その点を少し考えてみたい。

マローンは、オーホトヘレの *Gotland* について言及し、次のように述べていた。すなわち、*Jutland* は、ベーオウルフの故国 *Geatas* の *Jutland* における支配後、*Gautland* と呼ばれるようになっていて、その *Gautland* がイングランドの南部の英語 (West Saxon であろう) によって *Gotland* に変化させられているとした⁽³⁵⁾。それに対してリークは、*Gautland* が *Gotland* に変化したものであるとしても、そのことにより、デンマークのユトランドに *Gautic state* (*Geatas*) があるということにはならない、つまりそれがジュートの国家としても存在し得ると述べる⁽³⁶⁾。リークは、ジュートという名称が中世の間、ゴートであるとも考えられていたとするからである。マローンの主張して

いる文脈は、あくまでベーオウルフの故国 Geatas がどこにあったかという事に関するもので、本稿のテーマとは直接的な関連はない。筆者は、マローンの立場はとらないが、マローンの、Jutland が Gautland に、さらには Gotland になったという指摘は、一つの仮説としては十分成立し得るであろう。もっともリークの持論である、北欧世界がゴートの名前で総称されていたということからすれば、マローンの述べる内容も、意味をなさないものになってしまうことにはなるかも知れないが。しかしながら一方でリークの、ベーオウルフの故国 Geatas を虚構の国とする考え方は、これまでの様々な検討から、成立が困難なのである⁽³⁷⁾。

また、スチーブンソンに対するリークの批判は次のようなものであった。すなわち、「アッサーによるジュートとゴートの混同について、スチーブンソンは、アルフレッド大王の時代におけるそのような混同は、イングランド人の場合には考えられないとして、その混同の理由を、アッサーがウェールズ人であることに求めている。そのような指摘は、スチーブンソンの、ジュートとゴートが相当以前から同一視されてきたという説得力のある論述の後になされているので、理解に苦しむ。」と⁽³⁸⁾。ところが、実際は、スチーブンソンは、最初に、アッサーがウェールズ人であるがゆえに Iuti, Iutae を Goth と混同したのであると述べ、その後で、ペーダの Iuti, Iutae が、ジュートではなく、大陸の起源不明の部族で、それが相当以前からゴートと混同されてきたとし、アルフレッドのオーホトヘレで、Jutland が Gotland と呼ばれているのは、Iuti と Goths の混同を正当化しているものように見えると述べているのである⁽³⁹⁾。スチーブンソンは、Iuti, Iutae とゴートは混同されてきたと述べているが、ジュートとゴートが混同されてきたとは述べていない。そしてその文脈で、前に触れた、当時 Jutland は、北方の人々により、Gotland、というよりはむしろ Hreið-Gota-land として知られていた可能性があるとしているのである。そしてスチーブンソンは次に、また Iuti は、デーン人のイングランドへの定住により、Jutland の Jutes と混同されてきたと述べている。そこでスチーブンソンは、Iuti とジュートの混同に言及するのである。

リークのスチーブンソンへの批判は、前提に誤認があると考えざるを得ないが、スチーブンソンの論述も理解が困難である。それは、「アルフレッドのオー

52 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

ホトヘレで、Jutland が Gotland と呼ばれているのは、Iuti と Goths の混同を正当化しているように見える。」と述べている点である。その場合、Jutland が Gotland と呼ばれていることが、なぜ Iuti と Goths の混同を正当化したことになるのであろうか。リークが Iuti をジュートと考えて、スチーブンの Iuti と Goths の混同についての指摘を評価したのも当然で、もし Iuti がジュートでなければ、「アルフレッドのオーホトヘレで、Jutland が Gotland と呼ばれているのは、Iuti と Goths の混同を正当化しているように見える。」という文章は成立しないのではないだろうか。スチーブソンは、Jutland が、当時北方の人々によって Gotland と呼ばれていた可能性があるので、アルフレッドにおいて、その混同が正当化されたように見えるけれども、それはむしろ事実の現われであるとしている。それはそのとおりであろう。しかし混同は、あくまでジュートとゴートの混同であり、そうでなければ Jutland と Gotland の混同はあり得ないであろう。また、スチーブソンが、Iuti を大陸の起源不明の部族とするのも、理解が困難である。Iuti は明らかに、『ウィードシース』の Ytan であり、『ベーオウルフ』の Eotan であり、すなわちジュートであるからである。しかしながら、本稿の観点からすれば、スチーブソンの言及した、アルフレッドの時代に、北方の人々により、Jutland が、Gotland、というよりはむしろ Hreið-Gota-land と呼ばれていたということが大変重要で、それはベーオウルフの Iuti すなわちジュートが、北方の人々によりゴートであると考えられていたことを意味し、結局、リークの言う、中世における、ジュート、デネ、ゴートの同一視を示唆しているものと考えられるのである。

5.

以上、アルフレッド大王によるオロシウスの古期英語訳について、とりわけその中のオーホトヘレとウルフスタンに見出される Gotland を中心に、その実体を検討してきた。まずオーホトヘレに見出される二つの Gotland については、諸研究家が、それを今日の Jutland であるとする共通の見解を持っていたが、提示された論拠は、それぞれ異なっていた。チェインバーズは、それを Jutland の別表現であるとした。マローンは、Gotland が Gautland を表わ

す南部の英語による表記とした。ショアーは、Jutland が Gotland と表記されているのは、もともとジュートとゴートは事実上同一の部族だったからであると考えた。スチーブンソンは、Jutland について、北欧のサガに Gotland の関連語が用いられていることを指摘した。

一方、リークは、中世ヨーロッパにおける Getae 伝説の中では、ジュートもゴートもデネも、そこから生じた存在であり、従って今日の Jutland が Gotland と表記されていたとしても、それは当時としては自然な認識であったとした。ショアーの認識とは近いように見えるが、ショアーは、実際にジュートとゴートとを同一部族と考えるのに対し、リークは、本来異なっている部族のジュートとゴートが混同されたと考えるのである。筆者は、そのリークの考え方を支持したいと考える。また、スチーブンソンの指摘も、その考え方を補完するものであると思われる。スチーブンソンの、アッサーによる混同の理由として述べられている事の一つは、リークの述べるように首肯し難く、またベーダの Iuti をジュートとしない点も理解が困難であるが、スチーブンソンの指摘のように、中世の北欧のサガでは、Jutland は、Gotland の関連語で表記され、Gotland との親近性を示唆するものであった。つまり北欧世界では、Jutland は広い意味で Gotland と考えられていたのである。すでにジュートはブリテン島に移住して時間が経過し、イングランド人にとっても、ジュートは、直接実感を持って捉えられる個別部族ではない状態になっていた。それゆえリークの言うように、ジュート、デンマーク、ゴートが Getae に由来し、とりわけゴートが本流であるという考え方が支配的になっていて、それがオーホトヘレの Gotland の表記となっていると考えられるのである。その考え方はまた、アッサーの、アルフレッド大王の母方の祖父はゴートもしくはワイト島のジュートの出である、という表現になって現われている。明らかにアルフレッドの母方の祖父はジュートの出と思われるが、それがゴートでもあるという考え方になっているのである。

ベーダの場合には、確かにジュートについての正確な認識があった。『ウィードシース』の著者においても、また『ベーオウルフ』の著者においても同様であった。しかしながら、やがてリークの言うように、ジュートとゴートは混同されるようになり、その結果アルフレッドのオロシウスのオーホトヘ

54 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

レの旅における Jutland も、Gotland と表記され、12世紀の歴史家ウィリアム・オヴ・マームズベリーに至って、ジュートがゴートに明確に置き換えられるようになるのである⁽⁴⁰⁾。

[注]

- (1) *King Alfred's Orosius*, ed. H. Sweet, *E.E.T.S.*, no.79, London, 1883.
- (2) Cf. *King Alfred's Anglo-Saxon Version of the Compendius History of the World by Orosius*, ed. J. Bosworth, London, 1859, II 11-17; Duckett, E., *Alfred the Great and His England*, Collins, London, 1957, pp.141-142.
- (3) Paulus Orosius, *Historia adversum paganos*, ed. C. Zangemeister, in *C. S.E.L.* 5, Wien, 1882 (Nachdruck 1962). *Historia adversum paganos libri VII*, ed. Karl Zangemeister, Leipzig, 1899; Deutsch mit Anmerkungen von A. Lippold und C. Andresen, I / II, 1985/1986.
- (4) Halgoland は今日の Helgeland である。Cf. Bosworth, *op. cit.*, p.46, fn.52.
- (5) アングルもサクソンも、既にブリテン島に渡った後の事であり、Hæðum (現在の Schleswig) に当時アングルやサクソンが多く居住しているとは思われない。以前アングル、サクソン等の居住地域の境界にあったが、現在デンマークに属している、の意であろう。
- (6) そのオーホトヘレの記述は本文でも触れるが、アングルの故地について、後の時代の様々な歴史家にとって、重要な典拠となった。Cf. William of Malmesbury. *Willeli Malmesbirensis Monachi De Gestis Regum Anglorum Libri Quinque*, ed. W. Stubbs, the Rolls Series, vol.90, 2 vols, London, 1887-1889; *Gesta regum Anglorum*, edited and translated by R. A. B. Mynors, completed by R. M. Thompson and Winterbottom, Clarendon Press, Oxford, 1998, ii -116.
- (7) ボルンホルム島はブルグンドの故地の一つとして知られ、その島の名称もブルグンドに由来する。ブルグンドは中世ドイツの叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の舞台となったゲルマン人の王国であった。Cf. Berndt, H., *Die Niebelungen*, 2. Auflage, Gustav Lubbe Verlag GmbH, Bergisch Gladbach, Ulm, 1987.
- (8) Chadwick, H. M., *The Origin of the English Nation*, Cambridge University Press, 1907, p.104.

- (9) *ibid.*, p.105.
- (10) アングルの故地に関しては、拙稿「アングルの故地とその移動の軌跡について——中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景について（4）」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第4号、2007年、を参照。
- (11) Shore, Th. W., *Origin of the Anglo-Saxon Race*, Kennikat Press, Port Washington, N. Y., London, 1906; repr. 1971, p.248.
- (12) *ibid.*, p.60, p.214. Cf. Stevenson, W. H., ed., *Asser's Life of King Alfred*, Oxford, 1904, p.4; Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, 2nd ed., Oxford University Press, 1947, p.23.
- (13) Godfrey, J., *The Church in Anglo-Saxon England*, Cambridge University Press, 1962, pp.285–286. Cf. Stevenson, ed., *op. cit.*, p.62ff.; William of Malmesbury, *op. cit.*, ii–122; Stenton, *op. cit.*, pp.268–269.
- (14) 拙稿「ベータ『英国民教会史』のアルフレッド古期英語訳および『ベアオウルフ』における Geatas について（2）——J. A. Leake の見解を中心に」、『異文化の諸相』、第27号、日本英語文化学会、2006年。
- (15) Shore, *op. cit.*, p.62.
- (16) Hodgkin, R. H., *A History of the Anglo-Saxons*, 3rd ed., vol. II, Oxford, University Press, 1952, p.644.
- (17) *ibid.*, p.646.
- (18) *ibid.*, pp.646–647.
- (19) Chambers, R.W., *Beowulf—an Introduction to the Study of the Poem*, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959, p.333, fn.3.
- (20) *O.E.D.* には Jutes について、Jute の 2 で、[In pl. *Jutes*, a mod. rendering of Bæda's *Jutæ* and *Juti*, in OE. *Eotas*, *Iótas*, *?Iútan* (gen. pl. *Iútna*), also *Geátas*; = Icel. *Iótar* people of Jutland on the mainland of Denmark.] と記されている。*Geátas* という表記があるのは、おそらくアルフレッド大王によるベータの『英国民教会史』の OE（古期英語）訳の記述に基づいているのであろう（Cf. *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, ed. Thomas Miller, *E.E.T.S.*, nod. 95–96, 1890, I, 12.）しかしながら本文中に示したように、Geatas は Jutes ではない。また *O.E.D.* には Jutland と Gotland についての記述は見出されない。

56 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

- (21) Malone, K., 'King Alfred's Geats', *Modern Language Review*, X X, 1925, pp.1-11.
- (22) Stevenson, W. H., ed., *Asser's Life of King Alfred*, Oxford, 1904, p.169. Cf. Chadwick, *op. cit.*, p.105, fn.2.; Hampson, R. T., 'An Essay on the Geography of King Alfred the Great and the Northern Voyages of Othere and Wulfstan', in *The Whole Works of King Alfred the Great: with preliminary essays*, ed. J. Bosworth, Vol.2, 1859, London; Ams Press, New York, 1969, pp.33-34.
- (23) Stenton, *op. cit.*, p.13, p.271.
- (24) Duckett, E., *Alfred the Great and His England*, Collins, London, 1957, p.145.
- (25) Stenton, *op. cit.*, p.13, p.237.
- (26) Loyn, H. R., *Anglo-Saxon England and the Norman Conquest*, 2nd edition, London and New York, Longman, 1991, p.24, p.93.
- (27) 拙稿「フリースラン：その故地と移住の諸問題」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第5号、2008年、を参照。
- (28) Loyn, *op. cit.*, p.94.
- (29) *ibid.*, p.24.
- (30) Bede (Bede). *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch. Plummer, Oxford, 1956, I - X V.
- (31) Leake, J. A., *The Geats in Beowulf*, Madison, Milwaukee and London, the Univ. of Wisconsin Press, 1967, pp.3-8.
- (32) *ibid.*, p.106.
- (33) Beowulf. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr. Klaeber, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950, ll. 1071-1191. 拙稿、「『ベオウルフ』フィン王の挿話におけるエーオタン」、『異文化の諸相』、日本英語文化学会、第25号、2004年；「ベータ『英国民教会史』のアフレッド古期英語訳および『ベオウルフ』における Geatas について——J. A. Leake の見解を中心に」(1) ~ (3)、『異文化の諸相』、第26号、第27号、第29号、日本英語文化学会、2005年、2006年、2008年、を参照。
- (34) Leake, *op. cit.*, p.104.

- (35) Malone, *op. cit.*, p.6.
- (36) Leake, *op. cit.*, p.104.
- (37) 注(33)を参照。
- (38) Leake, *op. cit.*, p.108.
- (39) Stevenson, *op. cit.*, p.169.
- (40) William of Malmesbury. *op. cit.*. ウィリアム・オヴ・マームズベリーは、ブリテン島への最初のゲルマン人の移住についてのベーダの記述に言及している箇所では、ジュートを *Iutae* と、ベーダの記述のままに表現しているのであるが (i - 5)、その後、ウェスト・サクソンの国王の系図に続くアングルの故地についての記述の中では、ジュートを *Gothos* (*Gothi* の対格) としている (ii - 116)。

ABSTRACT

Gotland in King Alfred's Orosius

Michio IWAYA

After accomplishing the unification of England through many difficulties, Alfred the Great began the translation of several Latin works into Old English. He intended to revive the glorious and prosperous culture in Northumbria which was noticeably represented by Beda and Alcuin. One of those Latin works he tried to translate was *History* of Orosius. Orosius was a prominent Roman historian and his *History* had become a classic in early Middle Ages. So Alfred hoped to introduce it to his people in simple and easy English. Translating it he added new illustrative and important passages of his own. In the description of Germania, for example, he inserted the voyages of Ohthere and Wulfstan, navigators searching the coasts around Scandinavia. There in their voyages Gotland is referred to three times, but the meanings of Gotland seem to be different each other. Gotland in Ohthere is apparently Jutland today and in Wulfstan today's Gotland itself. Why, then, does Gotland in the Alfred's Orosius have two different meanings, or why is today's Jutland referred to as Gotland in Ohthere? The views of modern scholars are divided on the question. This paper attempts to seek it through the investigation of how the Jutes were thought by the English in Alfred's day. The Jutes are a Germanic tribe who migrated to Britain with the Angles and Saxons in early Middle Ages, but their identity is still assumed to be an open issue.